

琉球大学学術リポジトリ

多文化教育における「日本人性」の実証的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 野入直美</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 多文化教育, 日本人性, 在日朝鮮人教育, 朝鮮文化研究会, 日本人教師, 日系ブラジル人, ホワイトネス研究</p> <p>キーワード (En): Multicultural Education, Japaneseness, Education for Koreans in Japanese, Korean Culture Club, Japanese teacher, Nikkei Brazilian, Research of Whiteness</p> <p>作成者: 野入, 直美, 倉石, 一郎, 中島, 智子, 松尾, 知明, 山ノ内, 裕子, Noiri, Naomi, Kuraishi, Ichiro, Nakajima, Tomoko, Matuso, Tomoaki, Yamanouchi, Yuko</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p>http://hdl.handle.net/20.500.12000/9030</p>

第3章 「ちがい」を触媒とした学びの文化 —朝文研卒業生のインタビュー調査から見えてきたもの—

中島 智子
野入 直美

1. はじめに

私たち（中島と野入）が神戸甲北高校と出会ったのは、ある偶然だった。神戸甲北高校に出会ったというより、たまたま同校の生徒に出会い、惹きつけられ、インタビューを重ねるうちに、彼女ら（インタビューしたのは全員女性だった）が育ち学んだ場所である神戸甲北高校に、より正確に言えば同校が総合学科であることに、その魅力の根源があることに気づいていった。

私たち二人は、それぞれ異文化間教育/多文化教育と社会学とを研究分野とするので、高校の外部評価を行うのは適任ではないと思っている。我々の調査は、後で詳しく述べるように、神戸甲北高校の朝鮮文化研究会（以下、朝文研と略す）活動に関わった卒業生を対象にそこでの経験を聞くというもので、卒業生の語りからその向こうに神戸甲北高校が見えてきたとはいえ、高校そのものを調査したわけではない。そして実は、結論的に言えば、卒業生の語りから見えてきた総合学科である神戸甲北高校のすごさというのは、総合学科であるという特徴や仕掛けから言えばあらかじめ想定されたものであるといえるかもしれない。

しかし、我々はその「結論」を初めから想定していたのではなく、つまり総合学科であるという枠組みで神戸甲北高校を見ていたのではなく、卒業生の語りに耳を傾けているなかで「発見」したのである。そういう点で、ここに小論を書かせていただくのも全く無駄ではないだろう。また、本書りに収められている手記や「卒業研究」によって、同校の学びを経験した卒業生一人一人の生き生きとした姿が再現されているが、我々の調査は個人の学びについてだけではなく、生徒たちを繋ぐ学びの相互性と、また卒業後も学びを継続する力となっている学びの自律性について幾分かを明らかにできたと考えている。その点でも何らかの貢献ができればこれほどうれしいことはないと思っている。

2. 出会い

神戸甲北高校の朝文研関係者の調査をすることになったのは、全くの偶然からだった。きっかけは、2003年8月に大阪で開かれた第24回全国在日外国人教育研究集会の閉会式で、生徒交流会の報告を聞いたことから始まった。生徒交流会とは、教員など「大人」たちが参加する研究大会と同時日程で全国の高校生（一部中学生も）が1泊2日で交流をするもので、実行委員会形式で行われ、閉会式ではその活

動内容を実行委員の高校生たちが報告する。その報告を聞いて、しっかりした運営と内容に感心した中島には、とくに実行委員として前に立っている日本人女子高校生と、生まれたときから民族名を使用しているため他の在日生徒の「通名／本名」という悩みを共有することが困難だったと訴えた在日朝鮮人女子生徒が印象的だった。

翌年の1月に、中島は全関西在日外国人教育ネットワークによる「ちがうことこそすばらしい！子ども作文コンクール」に審査員として出席し、偶然にも先の2名の高校生の入賞に立ち会った。さらに同年2月に第9回兵庫県在日外国人教育研究集会に参加して、神戸甲北高校の教員の「朝鮮文化研究会の10年の歴史－充実期と崩壊の危機－」の報告を聞いたとき、この二人の生徒も前に立ち、報告したのだった。

以上、長々と出会いを紹介してきたが、この3回の出会いが、もうすでに神戸甲北高校における生徒の学びを象徴していると言える。3回とも高校以外の外部の場所での出会いだった。しかし、それが学校での学びと切り離された特別な行事やプラスアルファの出来事ではなく、彼女たちの学びの連続性の中の一コマだったことは、後にインタビューをして知ることになる。

この頃私たちは、日本の学校における在日朝鮮人教育実践の分析結果を報告書にまとめている最中で、そのなかで日本人教師が在日朝鮮人教育における日本人生徒への働きかけを強調する割には実践記録に日本人生徒がリアルに登場することが少ないことが判明していたので、神戸甲北高校における朝文研活動への日本人生徒の参加について関心を抱き、インタビュー調査を始めた。その結果、まず日本人在校生と卒業生の2名へのインタビューを行うことができ、その後程なくインタビュー対象を日本人（元）生徒に限定することを見直した。なぜなら、数回のインタビューを通して、日本人だけを対象にインタビューを行うことの限界（というよりむしろ間違い）に気づいたからである。我々が注目した朝文研活動には当然在日朝鮮人生徒も存在し、朝文研に関わるメンバーは他のメンバーとの関係性、相互性の中で学んでいったことが明らかになってきたからである。特に、彼女たちの語りに出てくる重要なエピソード（彼女たちの語りに共有される核になるエピソード）が発見されてからは、エピソードに関わるすべての生徒へと対象が広がっていった。

こうして、2004年2月に開始したインタビュー調査は2006年9月までに13名に及び、うち日本人7名、在日5名を数えた。インタビュー時に在籍学生だったのは1人で（卒業間近だった）、他は全員卒業後のインタビューとなった。

この調査に関しては、2006年6月の異文化間教育学会で「高校の朝文研活動にみる日本人/外国人生徒の関係性と学び」と題して発表している。その成果を一部活用する形で、今回この原稿を書くことにした。まず、野入が我々の調査結果をもとに、

「相互の学びの文化」と「学びの場の自律性」を神戸甲北高校の学びの特徴として切り出している。ついで中島は、これらの特徴を含む調査結果から得られた知見を総合学科である神戸甲北高校の文脈に位置づけ直す作業を行う。なお、我々の調査はすでに述べたようにある時期の朝文研活動に関わったメンバーを主たる対象としたもので、神戸甲北高校 10 年の歴史の中のほんの一部の生徒に限られている。しかし、この生徒たちの学びは神戸甲北高校の総合学科の特徴を最大限に生かして得られたものであり、その特徴を凝縮する形で指し示していると思われる。

3. 相互の学びの文化、学びの場の自律性

神戸甲北高校の卒業生に話を聞く中で、強く印象づけられたのは、生徒たちが、さまざまな関係性の中で相互に学びあっており、ひとりの生徒の学びが別の生徒の学びへと、連鎖的につながっていることであった。この節では、その＜相互の学び＞とも言うべき関係性に注目し、その社会的な意味について考察する。また、そのような関係性によって、生徒たちが主体的に学びを広げていく、＜学びの場の自律性＞について検討する。

この章で描くことができるのは、総合学科 10 年間の歩みの中で、たくさんの生徒たちがそれぞれに織り成した学びの物語の一端に過ぎない。図 1 は、神戸甲北高校の朝文研を中心とする関係図であるが、ここに書き込みきれなかった関係の広がり、幾重にも広がっている。

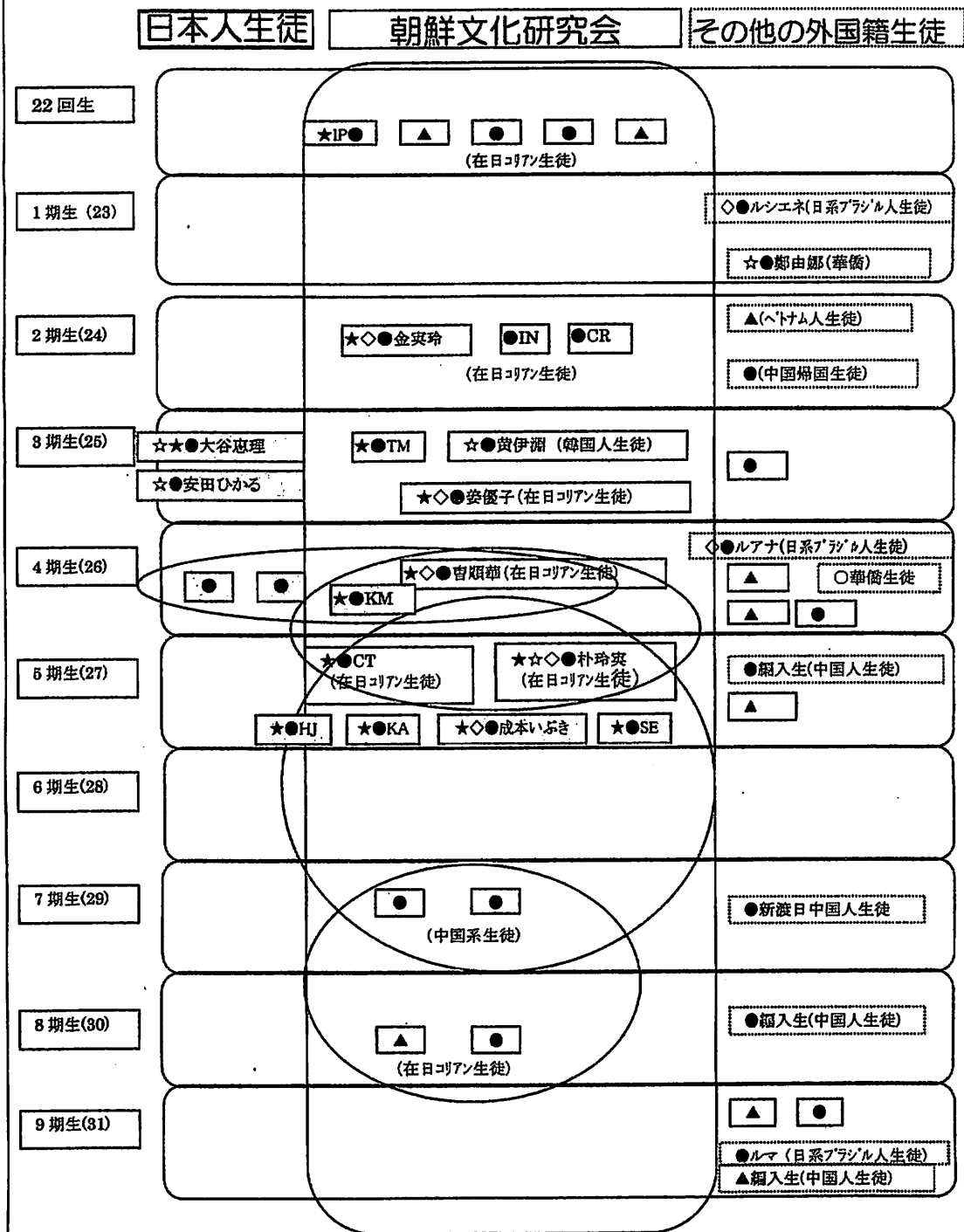
下記において、名前のイニシャルに*がついているのは、日本人の卒業生である。手記を寄せている卒業生と、「ちがうことこそすばらしい！子ども作文コンクール」入賞者は実名で、それ以外の卒業生の名前は、イニシャルで表記した。聞き取り調査が行えなかった賀伊瀬さんとルシエネさんについては、彼らが執筆した文章をもとに、関係性と学びの再現を試みた。なお、本稿で実名をあげた卒業生には、すべて連絡を取り了解を求めた。

(1) 「もしうちの周りに科さんがおらんかったら」

—在日朝鮮人生徒との友人関係を入りに学ぶ日本人生徒

聞き取りをした卒業生の中には、最初から卓越した力を持って入学し、周囲を導いていった人物は存在しなかった。誰もが、自分自身や今後の進む道について、未知数の部分や迷いをもちながら入学し、さまざまな気づきや出会いの機会の中で、自分にぴったりとくるものに引きよせられ、それを深めていっている。

図1 朝文研を中心とする生徒たちの関係図



<凡例>

● : 韓国朝鮮籍生徒

● : 日本籍生徒 ● : 女子、▲ : 男子

◇ : その他の外国籍生徒

☆手記を寄せている生徒 ★インタビューをした生徒
◇子ども作文コンクールで受賞した生徒

例えば、本書に手記を寄せている¹朴玲実さん（5期生）も、入学後に大きく変化した生徒のひとりである。中学時代からの彼女の友人であるSEさん*（5期生）は、中学時代からの朴玲実さんについて、このように話している。

「そのときは、うちが韓国のこととか聞いたら、あんまり聞かんといて、みたいな感じだったんですよ。通りすがりの先輩にからかわれるみたいなこと言うとして、聞いてもあんまり話してくれなかったんですよ。でも高校入ってからは、朴さんも朝文研入って、だんだん自信を持てるっていうか、在日のことを触れられたくないとか思わなくなってきたみたいで、それからはいっぱい韓国のこととかも話してくれるようになった。だから甲北にきてよかったって言ってました。うちもそう思う。」

SEさん自身は、朴玲実さんとの中学時代からの友人関係を入りに、神戸甲北高校でさまざまな学びを深めていった。

彼女は韓国語の授業を受講し、在日朝鮮人生徒のCTさんといっしょに、韓国語のスピーチコンテストに挑戦する。韓国語や韓国の文化に興味を深まり、さらに「高校入ってからも、うちはあんまり在日に関心持ってなかったと思う。ちょっと（朴玲実さんに対して）悪いなっていうのもあったし」、朝文研に入部することにした。部活動を通じて、韓国の音楽の楽しさにはまり、在日朝鮮人の人々の名前をめぐる思いの一端にも触れたという。さらに朴玲実さんといっしょに行った韓国でのホームステイでは、「韓国の人たちが本当に面白いし、元気な感じ、雰囲気大好きになりました」。帰国後、クラスの日本人の友人に、楽しかった韓国のことをいっぱい話した。

「結構みんな関心持って聞いてくれる人もいたと思います。うちとか朴玲実さんとかCTさんとかで、韓国語をちょっと話したりしてたんですよ、そしたら周りの子も、なにそれ、って言って、で、みんなで結構話すようになった。ちょっとずつ。ケンチャナヨー（注：気にするなよ）とか。」

SEさんは、家庭にもこの熱気を持ち込み、家族中が韓国文化にはまりだした。SEさん自身も、卒業後にも朴玲実さんら神戸甲北高校の友人たち、そしてホームステイで仲良くなった韓国人の友人たちとつながり続け、自分が通っているのは別の私立大学の韓国語講座に、朴玲実さんといっしょに通ったこともある。

「もし、うちのまわりに朴さんがおらなくて、甲北にも行ってなかったら、もしかしたらうちもこんな（朝鮮人を差別することを）言ってしまったたかもしれんから、うちが（知っていること、思っていることを）言っていかな、と思います。」

SEさんの学びは、朴玲実さんという友人との中学時代の出会いが、高校に入ってから韓国語の授業、朝文研活動、韓国へのホームステイによって深まった事例だと思われる。彼女は、朝鮮半島をめぐる情勢について、どのような情報が流布されていても、自分が実際に結んできた関係性に根ざして、自分の言葉で周囲に語ることでできる日本人卒業生のひとりであると思われる。

(2)「当事者性を生かした進路」という出発点からの学び

SEさんに大きな影響を与えた朴玲実さんであるが、彼女自身は、神戸甲北高校で自分を深く動かした人として、4期生の曹順華さんのことを振り返る。

「順華先輩と出会わなかったら、全然違ってたやろうし、あの先輩がいろいろ発言しているのを見て、今まで、思っていることはあっても、みんなの前で発言することは格好悪いと思って、それがあの先輩のおかげで発言したり伝えたりしたいって思うようになった。」

入学時の成績で言えば、朴玲実さんは曹順華さんよりずっと上である。彼女は「もっと他の、高いところに行けるって言われて」いたけれど、「やっぱり総合学科でいろいろやれるっていうので」神戸甲北高校へ入ってきた。

一方の曹順華さんは、

「高校に行けたらまあいいか、みたいな感じで、結構、周りでは（甲北を）受ける子がいて、その流れっていうか、（甲北高校が）アジアと結ぶというのをやってるからっていうので（中学校で）薦められて、甲北高校に（推薦入試で）行かないと、一般受験ではもう高校に行けないくらいほんとに悪くて」

という入り方であった。この曹順華さんが、朴玲実さんのメンターとも言うべき存在となっていたところに、成績に基づく序列とは別個の、学びあいの関係性を見ることができるといえる。

曹順華さんは、中学生の時、在日朝鮮人であるという当事者性を推薦入試でアピールすることにして、自分の両親に、祖父母が日本にやってきた経緯を聞いてみた。それで、初めてその経緯が強制連行ではなかったことがわかったという。

入学後、当初は朝文研に入部するつもりはなかったが、2期生の先輩たちに「すごくきれいな人が多くて、韓国の人ってきれいな人が多いでって言われて、うれしくて」入部した。それまでは、親からも友人からも日本名で呼ばれていたが、

「朝文研の中でスナ（民族名）って呼ばれるようになって、初めてスナって呼ばれるも振り向けるようになったし。愛着もわいてきた」。

学年が進むにつれて、大学進学を志すようになったが、やはり、成績を上げるための勉強はあまり得意ではない。再び当事者性を生かして、私立大学のAO入試を受験することにした。そのために、韓国語を受講して猛勉強し、韓国語のスピーチコンテストに出場したり、中学生のときから親友だった日系ブラジル人のルアナさんといっしょに、FM わいわいという多言語放送局に企画を持ち込んで、「恋人ができたときに感じる、日本人とのギャップ」というネタなどで、実際に番組でDJをしたりした。また、神戸甲北高校から姉妹校の蔚山情報通信高校へのホームステイにも応募し、その韓国滞在中に、「韓国人が（在日朝鮮人のことを）全然知らないっていうのを知って」衝撃を覚えた。この驚きは、大学進学後の在日朝鮮人についての学びへ、また韓国へ

の留学へとつながっていく。

曹順華さんは、成績という面での学力は低く、当事者性を生かした進学しかないという切羽詰った動機から、自分が在日朝鮮人であることに向き合い始めている。しかし学びは、いったん始まると、当初の動機からは一人歩きを始め、本当にやりたいことの発見へと彼女を導く。さらに、在日朝鮮人であることを顕在化させ、一番信頼できる友人と、自分がやりたい方法で自己表現をする姿は、後輩の朴玲実さんに、強い感銘を与えるのである。

(3)在日朝鮮人生徒の学びに結びつく、日系ブラジル人生徒の学び

曹順華さんの学びは、中学時代からの親友のルアナさん(4期生)、そして彼女の姉で、1期生の先輩でもあるルシエネさんの学びに支えられている。

ルシエネさんは、小学生のときにブラジルから日本にやってきて、日本人によるいじめや無理解に苦しむが、それを外に向かって表すことができなかった。高校生の夏休みの自由研究を、久しぶりに帰国したブラジルでの調べ学習をもとに行い、学校的最優秀賞を受賞したことが自信になって、大きな転機を迎える。

のちに曹順華さんとルアナさんが行うFMわいわいのDJも、その前にルシエネさんが行っていて、ブラジルについて、ひとりひとりの人間の違いについて、熱く語っていたことが背景にある。ルシエネさんは、高校生の主張コンクールでこれらの体験を述べ、文部大臣賞を受賞し、AO入試による大学進学という進路を切り拓いた。

彼女の学びは、妹のルアナさん、もう一人の妹のルマさん(9期生)、曹順華さん、曹順華さんを通じて朴玲実さん、その友人たち、さらに下の後輩たちの学びへと、連鎖するかのようにつながっていくのである。

(4)共鳴する<自分探し>の物語

本書に手記を寄せている大谷恵理さん*(3期生)の学びもまた、親友の姜優子さんの学びを通じて、ルシエネさんの学びとつながっている。

手記にあるように、大谷さんが韓国語を学べる大学への進学、さらに韓国留学へと進んでいったのは、高校時代に親友から、自分が在日朝鮮人であると告白され、「韓国の事も、在日韓国・朝鮮人のことも何一つ知らない自分自身」に直面したからであった。大谷さんと、彼女に告白した姜優子さん(3期生)にとって、その告白は忘れられない記憶である。

そのときの大谷さんは、「正直言ったら、中国も韓国も区別がつかないくらい」何も知らなくて、なぜ朝鮮人が日本にいるのか、疑問で頭がぐるぐるしたという。大谷さんは、直接に姜優子さんにいろいろな質問をするのではなく、「それ、知らないのは私自身の問題だから」、自分で韓国へのホームステイを申し込み、韓国語の授業を受講し

始めた。

一方、姜優子さんは、大谷さんに告げたことや、自分のこれまでの気持ちを、書くことが好きだった作文の形にしてみた。それを、「ちがうことこそすばらしい！子ども作文コンクール」に応募するように顧問にすすめられ、受賞したことで、「本名で賞状が来てるけど、みんなの前で、表彰、どうする？」という、思いがけない展開になっていく。

実は、2 学年先輩にあたるルシエネさんが、やはり自分自身について作文を書き、それをクラスの前で、さらに全校生徒の前で読み上げることで、自分が日系ブラジル人であることをみんなに伝えていた。姜優子さんは、顧問からそれを聞いて、自分もできるかもしれないと考えるようになった。

姜優子さんが大谷さんに在日朝鮮人であることを告白した後、二人はそれぞれの場で、別個に学びを深めていく。姜優子さんは、全校生徒の前で作文を読むという緊張の局面にあっても、前もって大谷さんに相談したりしない。

神戸甲北高校の生徒たちが切り結ぶ<相互の学び>の関係は、必ずしも同じ場所ですいしよに同じ体験をするということの意味しない。大谷さんと姜優子さんは、より広やかな意味で、<自分探し>の物語を共有している。そこでは、大きな課題にひとりで立ち向かわなければならぬこともあるけれど、それをしている彼らは、決して孤独ではない。ひとりの物語は、そこにつながる友人の物語と、どこかで共鳴しあっているからである。

姜優子さんと大谷さんの学びの連鎖は、姜優子さんの作文をコンクールに応募するように指導した顧問さえ、あずかりしらないところで起こっていた（2003）。生徒たちは、友人との関わりの中で大きく変化し、自分の力で学ぶ道を切り開き始める。<相互の学び>は、教員が意図せざる広がりへと、豊かに紡がれていく。そこに、<学びの場の自律性>を見て取ることができるように思われる。

(5) 「何で隠してきたんやろう」一朝文研の転機と在日朝鮮人生徒の葛藤

その頃、神戸甲北高校の朝文研は、大きな転機を迎えていた。本書に手記を寄せている韓国人の黄伊淵さん（3 期生）が、日本に来てからサムルノリにはまるようになり、たまたま、同級生の TM さん*がサムルノリの経験者であることを知って、彼女を誘って、朝文研でサムルノリをやりたいと言いはじめたからである。

神戸甲北高校の朝文研は、1995 年に顧問が、在日朝鮮人であることを伏せて通学している生徒どうしがお互いに出会うために設立したものである（1996）。それ以降、日本人生徒たちには存在すら伏せられたサークルとして、放課後に社会科教室で、内々の集いが持たれていた。姜優子さんが大谷恵理さん*に在日朝鮮人であることを告白した理由は、この集いに出席するたびに大谷さんを校門のところで待たせていて、そ

の理由を正直に大谷さんに言えないという苦しみ、耐えがたくなってきたためなのである。

内々の集いであれば、音を出すサムルノリを練習したり、まして生徒の前で公演したりということは、考えられない。このような朝文研のあり方を変えていったのは、黄伊淵さんと TM さん*、そして偶然に同じ時期に、自分が在日朝鮮人であることを全校生徒に対して伝えようとしていた、姜優子さんだった。

姜優子さんの行動は、それまでの内々の集いで姜優子さんと顔を合わせていた、在日朝鮮人の先輩たちを大きく揺さぶった。

そのひとりである釜実玲さん（2 期生）は、人目がとても気になって、中学校までどうしても自分が在日朝鮮人であることを周囲に言えなかった。「新しいところに行つて、（在日であることを）言つてしまいたいという気持ちがあつて」、先輩であるルシエネさん（1 期生）が甲北高校で堂々と日系ブラジル人である自分を表現していることも聞いて、甲北高校に入学してきたが、3 年生になるまでは、決心がつかなかったという。

「優子さんが、まさか全校生徒の前で言う、そんなこととは思つてなくて」。

どちらかという内気で物静かな後輩だと思つていた姜優子さんの行動は、釜実玲さんの背中を押した。釜実玲さんは、自分も何かしようと思ひ、まず韓国語を受講し、「卒業研究」でも在日朝鮮人をテーマに選んで、本を読み始めた。サムルノリを朝文研でやろう、生徒たちに向けて公演しようという提案が黄伊淵さんと TM さん*から寄せられたとき、釜実玲さんは、躊躇しながらも賛成した。

「あのときね、実は嫌やつたんですよ。あのときも、友達に（在日朝鮮人であることを）言つてなかつたんですよ、でも、実際サムルノリをしたら、覚えたい、なんかこう、やってみみたい興味はすごい、あつたんですよ。ただ、（練習場所に）行くまでは、気持ちが重かつたんですね。」

彼女はサムルノリの公演で、初めて「釜実玲です」と、本名を名乗った。彼女と同じようにそれまで在日朝鮮人であることを伏せていた IN さん、CR さんも次々と名乗った。すると、観ていた生徒たちの間から、彼女らの名前を呼ぶ歓声があがったという。釜実玲さんは、だんだん気持ちが軽くなってきて、文化祭の学年集会で、今まで言えなかつたことをみんなの前で語ることができた。

「なんで隠してきたんやろうって思う、今となつては。」

釜実玲さんが在日朝鮮人であることをオープンにしても、彼女が恐れていたような、どうして今まで嘘をついていたのかと責められるといったことは、起こらなかつた。

神戸甲北高校の日本人生徒たちは、それまでに、ルシエネさんと姜優子さんが自分の気持ちをつづつた作文を読み上げ、語る言葉を聞いている。さらに、希望すれば韓国語や中国語、インドネシア語、ベトナム語の授業を受講できる環境がある。それら

のクラスでは、その言葉につながるルーツを持つ在日外国人の生徒が、一緒に学んでいることもある。また、修学旅行やホームステイで、韓国に行く機会もある。

もちろん、すべての生徒が〈アジアと結ぶ〉という理念に関わった高校生生活を送るわけではない。しかし、チマチョゴリを着た生徒たちがサムルノリを演奏すれば、それを楽しみ、在日朝鮮人の生徒たちが本名で挨拶すれば、歓声をもって応えるという学校文化は、すでに2期生の金実玲さんの時代から、芽生えていたように思われる。

(6) 在日朝鮮人生徒の葛藤から学ぶ日本人生徒

それまで、内々の集いであった朝文研が、全校生徒の前でサムルノリを公演したり、強制連行の史跡を調べて文化祭で発表したりするサークルになっていく。そのとき、それまで在日朝鮮人であることを伏せてきた生徒たちが体験した葛藤は、生易しいものではなかったと思われる。

黄伊淵さんと一緒に、サムルノリをするために朝文研に入部してきたTMさん* (3期生) は、言葉少なに、しかし真剣に、先輩の在日生徒たちの葛藤に耳を傾けていた。

「あたしは、すごく親しくしている子に（実は自分は在日朝鮮人だと）カミングアウトされたら、どういう言葉をかけるかなって考えたんですよ。あんまり驚かないっていうのも、なんか、自分は大きいことに考えていたのに、相手にとっては小さいことって思われているのが嫌、って、一度、聞いたことがあって、…打ち明けてくれてありがとうございますっていうのは、言おうって決めてたんですよ。」

朝文研の中で、初めてのサムルノリの公演の前に、本名で挨拶するのかが話し合われたことがある。日本人であるTMさんは、その場では「引いて」、口をさしはさまず、心の中で、自分が関わりを持つ場面を想定し、考えをめぐらせた。

在日朝鮮人の金実玲さん、INさん、CRさんは、自分たちで決めて、本名で挨拶する。

「すごいなっていうのは、すごく（記憶に）残ってますね。とうとう言ったんだって。（その前にみんなで）話をした記憶がありますね。打ち明けて、なんて言われるか怖いっていうこととか、みんながどういう目になるんやろう、とか（先輩たちが）言って、ああ、そうやな、って。」

(7) 日本人であることの意味を問う

それから、TMさんはしばしば、朝文研で、あるいは在日外国人の高校生の交流会などで、「外国人の中でたった一人の日本人でいること」を体験し、自分自身について、考えるようになった。

「他の（在日外国人の）子は、日本人になりたいっていう意識がある人もいないですか。私は逆に、日本人でいることが申し訳ないっていうような、そういう感覚

に陥った。普通の学校とかで、在日の人って、日本人に囲まれて、自分だけ仲間はずれみたいな、そんな感じじゃないですか。話を聞くと、(在日外国人の生徒交流会などの場で) その逆で、(自分は) ひとりだけマイノリティーで、なんか、すごい不安じゃないですか。友達ってわかってるんですけど、やっぱりその仲間に入れない、入れてるんですけど、やっぱり入れてないのかなって思ってしまうのは悲しいですね。

それから、私は在日の人を見て、うらやましいって思ってたんですよ。だって友達によっては、二言語しゃべれるじゃないですか。家で、韓国料理が食べられるとか、あと、二つの文化を知ってるから、ひとつより二つのほうがいい。自分はひとつしかないし、日本人に生まれてきて、何にも持っていない気持ちになるんです。自分が日本人って、すごい意識したのが、サムルノリに入ってからなんですよ。で、『日本人なのにサムルノリをがんばっている』と言われるのが、うれしいのと同時に、日本人であるっていうことを、あんまりうれしく思わない。」

彼女は高校卒業後、アジアとの交流がさかんなことで知られる私立大学に進学し、開発に関連する経営学を学び始めた。そこで、東南アジアの国々にホームステイやインターンシップで滞在する機会に恵まれ、学びを深める中で、「私は日本人以外にはなれない気がしてきた」という。

東南アジアにあって、容姿が似ているので地元の人に間違われることはあっても、「やはり文化とか今まで生活してきたのは日本人そのものであって、たとえ国際結婚することがあっても自分は日本人っていうことを変えられない」、ならば、「日本人にできることを探そう」という意識が芽生えてきた。それは、もう一度、自分自身が育んできた考え方や、行動、能力を見直し、使えるものをすべて駆使して、他のアジアの人々と、よりよい開発の形を模索していきたいという将来像へと結びついた。TMさんは、実際に経営コンサルタントの会社に就職し、開発コンサルタントへの道を歩み始めている。

(8)卒業後に響き続けるもの—相互の学びの文化

TMさんにとって、就職活動はたやすいものではなかった。

迷いがたれこめたとき、彼女がやったのは、友人に、彼女がどのように見えるかを聞いてみるということだった。

「自分のすごいとこってなんやろって考えたときに、私は在日であるとか、その、何々人っていうことにこだわって人に接しない、それがお前はほんまにすごいわれて、あ、そうやってそのとき気づいたんですね。それは本当にそうで、私はアメリカ人の友人がいるねんっていう言い方は絶対にしないんですね。それはなんでかっていうと、友達がアメリカ人なだけで、そういうことにあんまりこだわってない。で、つきあうことができる。友達は友達っていう。そういう感覚っていうのは、今まで在日

の人や留学生と接してきたから培われたものであって、すごくよいことだな、そういうことで人を判断せず、人間関係を作れるっていうのは、すごい財産なんやなって思っています。」

TMさんの神戸甲北高校における学びは、相手の民族性や背景を受け止めながら、それに阻まれることなく関係を結んでいく力へと、つながっていった。

さらに、困難に直面したとき、「私はどんなふうだろうか」と、心を開いて聞いてみることでできる友人を作る力、「こういうところがすごいよ」と語ってくれる友人との間で結ばれる、相互の学びという関係性の文化、それはまさしく、神戸甲北高校総合学科の学びの賜物ではないかと思われる。

(9)縁の下の教育実践とく学びの場の自律性

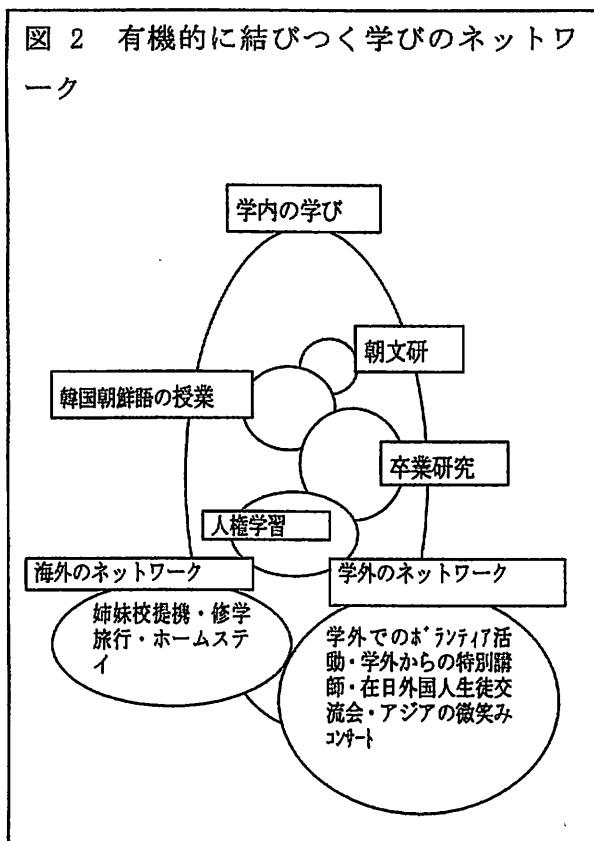
卒業生の中で印象深かったのは、その語られ方であった。彼らが語る流れにそって在学中の思い出を聞いていくと、そこには、教師の姿があまり登場しないのである。彼らは、「私はこう感じていて、こんなふうにしていました」と、一人称を用いて学びを振り返る。そして、そこにいた友達と、自分自身のことを語る。

その語りの中で、表面的に見れば、教師の姿は希薄にさえ感じられる。これは、教師が生徒の記憶に残る教育をしていないというようなことではなく、彼らのいた学び

の場では、教師が逐一、介入や指導を行わなくても、生徒たちがそれぞれに自分の力で学びを体得し、相互に学び合える、く学びの場の自律性>が成り立っていたためではないかと考えられる。

そのく学びの場の自律性>は、学校や教師の無為を意味しない。むしろ、それとは逆に、「卒業研究」や人権学習などのさまざまな学びが有機的につながりあっていることと、さらにそれらが、学外、海外にまで広がるネットワークに結びついていることによって、下支えされている(図2)。学校と教師は、「希薄」どころか、このようなシステムの立ち上げと運営に関わるマクロな面と、ひとりひとりの生徒の背景や適性に寄り添った指導というミクロな面の両方について、縁の下で、しっかりと編み上げ、糸車をまわ

図2 有機的に結びつく学びのネットワーク



し続けている。その「縁の下」の営みが功を奏したとき、卒業生たちは、教師から施された教育の記憶という形ではなく、自らが友達と歩んだ「自分探し」の物語として、学びを語るのである。

このような物語と語りの力をもって卒業することは、若者たちのセルフ・エスティームを高める上で、大きな力となっている。私たちが卒業生に聞き取りをして感銘を受けたことのひとつは、どの若者も、自分自身の言葉で紡ぐ、オリジナルの物語を持っていることであった。同じエピソードを複数の卒業生から聞いたとき、同じ物語はひとつとしてなかった。彼らの語り、そして本書に収録されている手記の魅力は、ひとりひとりの内面にあるセルフ・エスティームに裏打ちされた、技法だけではない本当の「自己アピール」の力によるものだと思われる。

(10) <相互の学びの文化>の社会的な意味

最後に、生徒たちがお互いに学びあい、一人の学びが他の生徒の学びへと連鎖していく<相互の学びの文化>が、今日の社会において持っている社会的な意味について述べておきたい。

<相互の学びの文化>の中で萌芽をつかんだ若者たちの中からは、高度な専門性を備えた人材として社会に貢献する人々が出始めている。そのような個人の職能の次元だけでなく、関係性という次元で、彼らは、属する組織や集団、関わりを持つ人間関係において、得がたい人材になっていくのではないかと私は考えている。聞き取りをした卒業生の若者たちは、<相互の学びの文化>を無意識のうちに再生産して広げていく、静かな波紋を周囲に及ぼしているように見えるのである。

いくらかの若者たちは、それぞれの進路先で出会った人々と、学びあう関係を新たに結びつつある。それは、偶然によって恵まれたものではなく、「何か、違うなと思ったら言っていく」、「すごいと思った人にはこちらからアプローチする」などの、主体的な働きかけによって結ばれていくものである。

彼らは、競争一元的な関係や、それと表裏一体を成すような集団主義的な関係に直面したとき、ただ飲み込まれるのではなく、それに違和感を覚える力を持っている。それは、神戸甲北高校の総合学科で「自分探し」を行った体験を通じて、自己実現とは、人と競争して打ち勝つことや、周囲に同化することで成るものではないということを知っているからこそ抱くことのできる、鋭い感覚である。

集団や組織の側から見れば、お互いに学びあう関係によって自分が大きく変わったという実感を持っている人の存在は、きわめて貴重なものとなる。現代の日本社会では、どのように卓越した権威や実績を持つ組織であっても、問題を起こし、それを隠蔽し、壊滅に瀕することが起こりうる。先見の明のある組織は、競争の論理だけではなく、組織の安泰のために成員が目と耳と口を閉ざしているような集団主義でもない、

新しい組織づくりを必死ですすめている。そこで重視されるのが、他ならぬ＜相互性＞なのである〔宮本幸二ほか 1994〕。このような時代にあつて、神戸甲北高校総合学科が＜相互の学びの文化＞を体得した卒業生たちを送り出していることの社会的な意味は、決して小さいものではないと思われる。

私たちが聞き取りをした時点では、ほとんどの卒業生は、大学や専門学校に在学中であつた。彼らが働き始めたとき、＜相互の学びの文化＞は、どのように真価を発揮するのだろうか。彼らの学びの豊かな物語は、これから先へも、はるかに続いていくのである。

4. 総合学科と「個性化」「多様性」

前節では、神戸甲北高校の外国人生徒と日本人生徒が相互にさまざまな関係を結びながら学びを拓げていった様を描いた。ここでは、神戸甲北高校の総合学科としてのシステムが、どのように機能してこうした結果をもたらすことができたのかを見ていく。

総合学科は、生徒の時間割がそれぞれ異なることをはじめ、制度として個性化を認め、多様性に開かれた学校であることが特徴だといわれる。1980年代以降に進行してきた高校教育改革の中で、1994年に創設された総合学科は、「パイオニア」と位置づけられ、改革の中心的存在と目されてきた。生徒の興味関心にもとづいた多様な進路意識を形成することにより、高校間格差構造を是正し、高校が生徒の豊かな人間性を育成する場として機能することがめざされたのである。この「個性化」「多様性」推進の方針は、言うまでもなく日本人生徒の個性化・多様性に対応して推進するばかりではなく、さまざまな立場や文化的背景を持つ生徒が、その個性を生かし、学びに活力を与えることを可能にするはずである。

しかし、これまでの総合学科の評価に関わる研究においては、教育内容や生徒の進路意識の形成や変容について中心的に扱われることが多く、その際に学校ランクや生徒の興味・関心に基づく分析がなされることはあつても、生徒のエスニシティとの関連に言及されることはないようだ。また、総合学科制高校の取り組みをまとめたものは出版されているが、多くの場合、エスニシティという意味での生徒の多様性はないことを前提に書かれているか、総合学科のシステムと切り結んでの記述にはなっていない。「個性化」「多様性」の伸長と言いながら、それは「日本人」の枠に留まっていることが多いのである。また、多様な背景の生徒の学びに言及されていても、教師の側からの描写であり、生徒自身が何を感じ、何を学んだかを表現するような様式を備えたものはあまりないようだ。

しかし、私たちの調査が発見したのは、神戸甲北高校の総合学科というシステムが、多様な背景の生徒を惹きつけ、引き合わせ、その学びを拓げていった様である。そこ

で本節では、本校教育目標の一つである「個性を尊重し、『ちがい』を認め合い高め合う関係を築き、『人間としての尊厳』を育む」がどのように達成されているのかについて焦点づけた検討を行う。

図1を見るとわかるように、総合学科になる以前から在日朝鮮人生徒は在籍していたが、総合学科となって以降、日系ブラジル人、在日華僑、ベトナム人、中国帰国家族、韓国人(在日ではない)、中国人生徒が毎年のように入学・編入してきている。以下では、このように多様な生徒が編入学してくるには、(1)入学動機となる誘因は何か、(2)編入学後にどのような学びをしたか、(3)卒業後の進路形成はどうか、という観点から見る。ただし、非日本人生徒だけを取り出すのではなく、『ちがい』を認め合い高め合う関係にあった日本人生徒を含む卒業生を対象とする。

(1)入学動機

調査した卒業生が語る入学動機は、総合学科であることの魅力、カリキュラムの魅力、入試方法、の3つにまとめられる。

まず、「総合学科であることが魅力」や「普通の高校生にはなりたくない。総合学科が面白そう」という言葉に表わされるように、兵庫県で最初にできた総合学科として、普通科の高校とは違うところに魅力を感じた受験生を惹きつけていた。調査対象者が5期生までということで、総合学科であるということだけでもインパクトが強かったと言える。カリキュラムの魅力としては、「時間割が選択制なのが魅力」「芸術系の科目をいっぱいとりたかった」「将来心理学の方に進学するための科目が取れる」「韓国語がある特別な学校」というように、科目選択ができることと、他校にはない科目があることが魅力としてあげられた。

この中から、日本人以外の生徒のケースをみると、総合学科であることや科目選択できることなど共通の理由が多い一方で、非日本人生徒に固有な理由もある。

「韓国語がある特別な学校」という理由を挙げたのは在日朝鮮人の卒業生で、彼女はずっと日本名を名のっていたが、父親が民族団体の活動をしており、家庭では食事は「食卓にキムチ」が普通で、親戚が集まる法事では韓国語が飛び交い、小さい頃から「オリニキャンプ」という在日朝鮮人の子どもが集まるキャンプに参加する経験を持っていた。彼女が神戸甲北高校に韓国語があることを志望理由に挙げたのは、同居する1世の曾祖母と韓国語で話したいということが強い動機となっていたからだ。

また、別の二人の在日朝鮮人の卒業生は、神戸甲北高校の在日朝鮮人教育への取り組みを理由としてあげている。一人は、「母親が在日の教育問題に詳しい日本人教師と懇意で、甲北高校の情報を得た」と語っていた。ただし、この卒業生の志望理由はそれだけではなく、「総合学科であることの魅力」や「制服がかわいい」ことも理由としてあげている。もう一人は、中学校の教師から、「もっと在日について知ってみたらど

うか」と甲北高校を薦められたという。神戸甲北高校のキャッチフレーズの一つに「アジアと結ぶ」があることも、中学校教師の推薦理由に入っていたという。

我々の調査対象者ではないが、本書の第IV部の「卒業研究」選集に取り上げられている作品の例を引くと、中国残留婦人を祖母に持つ脇真由美さん(2期生)は、3年生の時に書いた作文の中で、神戸甲北高校を志望した動機を、「高校は、個性を尊重する理念を掲げている総合学科の甲北高校を選んだ。時間割を自分で選択できるシステムなど魅力がいっぱいあった」と語っている。これだけなら、他の日本人を含む多くの志願者の理由と共通するものである。しかし、「個性を尊重する理念」に自分固有の思いを込めていることが、「しかし、全く私のことを知っている人のいないところでやり直したいと思う気持ちがどこかであったことも否定できない」と述べているところに表れている。その背景には、11才で来日した彼女が、「何事も目立たず人並みにというのが暗黙のルール」の中学校生活において中国人であることを隠すようになり、自分をさらけ出せずに「日本人」を演じることに疲れ、自分を素直に出して本当の友達を作りたいと思っていたという事情がある。

入試方法としては、「内申も実技重視なので得意の音楽で苦手な数学をカバーできた」と、普通科高校とは異なる入試方法に魅力を感じたと日本人卒業生が答えていたが、在日朝鮮人生徒の場合、推薦入試制度が効果を上げている。ある生徒は、「在日について関わるのはいやだったが、成績が悪く、推薦で合格するのに在日だというネタを使うしかないと判断」したと答えている。神戸甲北高校が在日生徒にアフターマティブアクションを実施しているということはないが、先に見た「在日朝鮮人教育に熱心な学校」というイメージから、推薦入試で面接を受ける場合には在日であることを明らかにした方がいいと受験生の方が思いこんだということだろう。また、推薦入試の場合、学区指定がなく県下全域から受験できる。そのため、広い範囲から多様な背景の受験生を惹きつけることができているということになる。

さらに、中国や韓国からの生徒を編入で受け入れていたことも注目される。本書に手記を寄せている3期生の黄伊淵さんは父の仕事の関係で来日し、最初は私立高校に入ったがその学校文化と合わないと感じて、神戸甲北高校に転入してきた。前節で述べたように、彼女の存在がその後の朝文研活動の大きな分岐点となり、そこからさまざまなドラマを生み出すきっかけとなった。日本語を短期間で使いこなせるようになり、韓国の楽器演奏に興味を持って活動を続けた彼女の存在の大きさは、その個性によるところが大きい。彼女の存在を可能ならしめたのは、韓国からの生徒を編入で受け入れるという神戸甲北高校の制度であった。外国からの編入生の受け入れは他校でも可能であるらしいが、積極的に活用し、「お客さん」にせず相互作用的関係を築いてしっかり組み込んだところが、神戸甲北高校の強みであるといえよう。

(2)教育活動

多様な背景の生徒たちが、高校でどのような学びをしたか、特に総合学科であることの特徴を生かした学びができたかどうかについて、見てみる。卒業生たちの語りからは、選択科目、課外活動や学校行事、「卒業研究」が浮かび上がってきた。

生徒たちは、入学動機でも見たように、科目選択ができることを魅力と感じて入学してきている。そして、一人一人個性的な時間割を作っている。選択科目の中でも、我々の調査が朝文研関係者であったということもあって、韓国朝鮮語の履修者が多かった。韓国でのホームステイや修学旅行などで韓国語に触れる機会も多く、帰国した生徒によって学校でも韓国語が飛び交い、それに触発されて履修する生徒が出るという話も聞いた。

神戸甲北高校では、外国語では英語の他、韓国朝鮮語、中国語、ベトナム語、インドネシア語が選択できる。最近では韓国朝鮮語や中国語を設置する高校は増えているが、ベトナム語やインドネシア語はめずらしい。兵庫県にベトナム難民を主に受け入れる定住促進センターが設置されていたため、ベトナム人住民が多いという地域性や<アジアと結ぶ>という本校の方針を反映したものであろう。韓国朝鮮語や中国語は、韓国の蔚山情報通信高校や中国の上海位育中学と姉妹校提携を結んで生徒が交流する機会を持てることから受講にも結びつきやすいが、そういう機会のない、また日本社会での認知が低く取得の必要性を感じにくいベトナム語やインドネシア語にどのように生徒を動機づけていくのかが課題であろう。

調査の中で印象的だった科目として、選択科目の「アジアの音楽」と「日韓日朝関係史」がある。選択科目の音楽では、授業の内容を生徒と相談して決め、韓国の楽器を練習することになったことがある。この時の受講生は、在日朝鮮人生徒と日本人生徒が含まれていた。講師は外部から招かれた。このように、科目が選択であるだけでなく、授業内容を受講生と協議して決めたり、必要であれば外部から講師を招くという柔軟性が注目される。

「日韓日朝関係史」の授業を受けた大谷恵理さん*は、朝鮮半島からかつて鹿児島県に渡ってきた陶工の話聞いて、その陶工のもとに会いに行くという行動に出た。別に授業の課題だったというわけではないのに、授業で聞いた話に触発されてすぐさま行動に移したのだ。彼女は、韓国でのホームステイを経験して「韓国朝鮮語」の授業を履修し、さらに翌年この「日韓日朝関係史」をとったという。事前に連絡をしておかなかったのが結果的には会えなかったようだが、鹿児島までの道中に何を考え何を感じていたのだろうか、若い学びの心が感じられる。

この事例が示すように、単に興味関心のある科目を選択できるというだけでは、学びは連続しないし構造化されない。前節でも描写したように、生徒たちは学びを個人にとどめず相互に広げていったが、ひとりの中でも連鎖して学びが生じていた。それ

を可能にしたのが、課外活動や学校行事、またその延長で一人歩きしていく生徒の学校外での活動である。朝文研関係者であった我々の調査対象者が経験したのは、韓国蔚山情報通信高校の訪問とホームステイ、韓国や中国への修学旅行、朝鮮文化研究会の活動、朝文研活動として出演した文化祭、夏休みのニュージーランドやカナダ語学留学、学校外でのボランティア活動、学外の外国人生徒との交流会、学外での作文コンクールなどへの応募、などであった。

ある日本人生徒の事例を示そう。成木いぶきさん*は、高校2年の夏休みにニュージーランドに語学留学に行き知り合った韓国人の影響を受けて韓国への関心を抱き、高校3年の時間割で韓国朝鮮語を選択する。また、韓国への関心から、それまでそれほど仲良くなかった在日朝鮮人の友人と親しくなり、朝文研に入ってサムルノリ演奏や神戸鉄道の朝鮮人労働に関する研究発表をしたり、朝文研活動の延長で外国人の子ども（小学生）の集いのボランティアや全国在日外国人教育研究集会の生徒交流会の実行委員を務め、さらに日系ブラジル人の集いへの参加活動もおこなった。また、多文化保育所でボランティア活動も行っている。これらの活動を書いた作文で、「2003年度子ども作文コンクール」に入賞した。冒頭に紹介した、我々が調査をするきっかけになった生徒のひとりである。

ある在日朝鮮人の生徒の場合は、こうである。CTさんは、韓国のホームステイには行っていないが、蔚山情報通信高校からの生徒訪問時に交流を経験している。授業では、「韓国朝鮮語」、「アジアの音楽」、「日韓日朝関係史」を選択し、朝文研に所属して活動していた。朝文研でのサムルノリ演奏の練習は、学外でも出演の依頼を受けている。韓国語は、学校の授業以外にも民族団体が主催する教室にも通い、韓国語スピーチ大会に参加したり、ハングル検定を受けたりしている。また、在日1世のための老人ホームである「故郷の家」でのボランティア活動を定期的に行ってきた。

卒業生の語りを聞いていて感じたのは、彼女らの学びがいろんな境界を自由に飛び越えて語られていたことである。当初朝文研活動を中心に始めたインタビューは、あっという間にさまざまな学びの語りに埋め尽くされてしまった。ある卒業生は、「なんかごっちゃになって、どこが朝文研でどこが朝文研でないのかわからなくなって」と表現している。教科目も部活も学校行事も絡まった活動が繰り広げられている。さらには、学内と学外の境界もいとも簡単に越えられてどんどん学びが増殖している。学校というシステムから見ると、正規の教科や時間割と課外活動とか、学校内での活動と学外での活動などを分けて見てしまいがちだが、学ぶ主体の立場からはそのような境界は意味がない。それは、神戸甲北高校が総合学科であるということにとどまらず、「自分で物事を考え、行動できる『賢さ』を育む」、「人生を自ら切り拓く力と自己教育力を育む」という同校の教育目標を彼女たちが体現しているということである。知識を獲得するだけに終始せず、体験を通じて学ぶことを重視した学びの特徴や、自

らの関心に基づいてどんどん学びの場を広げていくことを後押しし、認めるシステムや学校文化があつてのことだと思われる。

その一つに、「卒業研究」が挙げられる。「卒業研究」が、これらのプロセスを生み出し、またその集大成となつていふと思われる。「卒業研究」は、総合学科の高校において目玉ともなる科目である。神戸甲北高校では、「卒業研究」は論文や資格検定、作品という形で可能であるが、ほとんどの生徒が論文を作成するという。1年次の「産業社会と人間」、2年次の「総合的な学習」を踏まえて3年次に必修で行われる「卒業研究」は、受験勉強期間中に負担になるという面はあるが、同校調査によると多くの生徒が負担だったと答える一方で重要な科目だったと感じている。総合学科に初めて赴任する教員にとって、「卒業研究」の指導にはとまどうことが多いようだが、ある教師が過去の「卒業研究」の作品集を読んで「とても驚いた。載せられている論文は、自分も書いたことがないような、奥深い文章であつたから。」(2004年度『総合学科紀要』)と語つていふように、大学の卒業論文に負けないような力作も多い。この教師は、「私の中で知らぬうちにこびりついていた偏差値による『学力』定義は、この時大きく覆つた」と続けている。別の教師は、「卒業研究はAO入試対策ではないか?」という疑問に対して、「NO」と答え、1, 2年次の学習でまいた種から成長して咲いた花だと「卒業研究」を位置づけている。「甲北高校に咲く花は規格品ではない。ふぞろいな花かもしれない。しかし野趣のある生命力の強い花」だといふ。

神戸甲北高校の「卒業研究」は、確かに本書に収められているものを読んでも、大学の卒業論文にも匹敵するような出来栄のものもある。しかし、注目するのは、単に文献を読んでまとめたというだけでなく、何らかの体験学習がそこに含まれている点である。時には体当たりの研究になっていたりする。たとえば、本書に収録されている脇真由美さんの作品は、中国残留孤児・婦人とその2・3世について、歴史的経緯や課題を文献資料などによってよく調べているが、そこには「自らのルーツを考へることによって、少しでも私自身のアイデンティティの確立の材料になれば」といふ思いがあり、長い時間をかけて調べ執筆した結果、「私の価値観や物事に関する見方がポジティブになつた」とし、二つの文化を持つことに悩み苦しむこともあつたが、「それらは成長の糧になつた」と言えるようになっていふ。しかも彼女はそうした過程で、研究も兼ねて日本語教室でのボランティア活動を続けていた。

私たちの調査対象者のケースで、在日朝鮮人の生徒が名前に関する「卒業研究」を行つていた。この場合も、文献調査だけでなく、祖母の聞き取りやアンケート調査の手法も交えているが、何より身体丸ごとの研究と思へるのは、研究中何度も投げ出そうと思ひながら続けた点である。といふのは、この生徒はいわゆる日本名(通名)を持たないために、通名を使う在日同胞と名前について話をしたときに、その考へに衝撃を受けて泣き出したことがあり、それ以来在日朝鮮人の名前について自ら過剰とも思

えるほどの反応を示して、そのために友人とぶつかるという経験もしていた。しかし、この研究を通して、「通名を使用する同胞と向き合い続ける」というように考え方が変わったという。

以上見てきたように、神戸甲北高校では多様な生徒たちの関心に合わせてカリキュラムが設定されているということよりも、いろいろな仕掛けが生徒の個性と出会い、個性を引き出し伸ばしている点が確認できる。個性化とは、個性をすでにあるものとして発見するのではなく、さまざまな出会いや活動の中で作り出されていくプロセスである。

(3)卒業後の進路形成

インタビューした生徒の高校卒業後の進路は、短期大学の保育専攻、4年制大学の国際関係学部、4年制大学の社会学系学部2名、4年制芸術系大学、4年制大学で朝鮮語専攻、4年制の国際系大学、4年制大学の福祉専攻、洋菓子の専門学校とさまざまであった。2006年3月卒業の同校生徒の進路状況を見ると、大学47.4%、短大9.0%、専門学校29.6%、進学浪人6.5%、就職4.4%、家事等2.2%である。同じ年度の数字ではないが、我々の調査対象者の4年制大学への進学率は高い。

しかし、そのことよりも注目したいのは、それぞれに進路をしっかりと形成している点である。このことは、インタビュー時にも早くから気づいていた。高校での学びの語りの中で、進路を意識した語りがよく出てきた。それは、1年生から始められるキャリア教育の成果であろう。科目を選択するには、自分の進路と向き合うことが求められ、常に進路形成を意識しながら学びを拡げてきたと思われる。また、科目選択だけでなく、「卒業研究」も大いに影響している。入学当初からの夢に向かって科目を選択し、進路を実現していったケースもあれば、さまざまな活動をする中で当初の志望とは異なる進路へとたどり着いた生徒もいる。いずれの生徒も、我々の調査が進学後比較的日子が浅い時期のインタビューであったこともあるが、自身の進路に満足し、さらに前向きな学びを始めていた。その姿勢に驚いた記憶がある。そのため、「甲北高校の生徒はみんなあなたたちのように積極的に学び、しっかりした進路意識を持っているのか？」と聞いたところ、そういうわけではないということだった。つまり、学校側で張り巡らしているさまざまな仕掛けをうまく活用できる生徒もいれば、そうではない生徒もいるということである。本書の同校教師の評価にも書かれているように、最近では徐々に「総合学科生としての元気さ、積極性、主体性に欠ける生徒」が増えてきているようである。

そんな中で、上記で見てきたように、個性を活かした学びをして成長してきた生徒たちは、多様な入試方法の中でもAO入試によって進学を果たしているケースがいくつかあった。その中には外国人生徒もいた。教員の話によると、総合学科に改組した

頃がちょうど AO 入試が拡大された時期で、「AO 入試は生徒のモチベーションが高まる」として積極的な利用をするようになったようだ。最初にブラジル出身のルシエネさんが AO 入試で東京の有名私立大学に進学したとき、学力だけではない別の面を評価されて進学を果たしたことに、「おもしろいなあと思いましたね」との感想を持ったという。前節でも触れているが、在日であることを積極的に活かして進学を果たしたケースもある。

すでにみてきたように、「卒業研究」やそれにつながるさまざまな生徒の活動や学習は、「AO 入試対策」としてのみ行われてきたのではない。しかし、AO 入試を見据えて活動が組み立てられたり、教師が働きかけたりしてきた。在日朝鮮人やブラジル人生徒などがおこなうその出自を生かした学習や活動は、通常の入試システムでは評価されないか邪魔であるが、AO 入試はそれをプラスに転化してくれる。その背景には、個性化を重視する大学の学生獲得戦略や、「異文化の尊重」や「多文化共生」を認めるようになった社会の側の変化という要因があったことも見逃せないだろう。神戸甲北高校の戦略は、こうした時代背景を的確に捉えたともいえる。自らの出自や文化に関わる要素が、単に民族的アイデンティティの側面だけで有効なのではなく、それも含めた「自分」という自己実現の文脈においても有効であり、トータルなものとして組み込める可能性が、「卒業研究」とその延長である AO 入試という一連の取り組みにみることができるのである。

卒業後も見据えたキャリア教育という点では、生徒たちが卒業後も学ぶ意欲を減ざることなく、さらにパワーアップさえして走り続けていることに注目したい。卒業生の何人かが韓国やカナダなどに留学した。また、ある生徒は、高校在学中に障害者の共同作業所で働く高齢者の聞き取りをしていたが、福祉関係の大学に進学した後、入学直後から児童館でボランティアをしたり、障害児と遊ぶサークル活動をしている。在日の親友とともに朝文研活動を支え、授業中の教師の言葉に納得できないと涙しながらその友人と抗議をした経験をもつ生徒は、保育士を目指して進学し、将来は多文化保育を志していて、大学の人権関係の授業担当の先生と話すのをいつも楽しみにしているという。大学進学後も韓国語の学習を継続するために、他大学の韓国語講座に出たり、地域の韓国語講座に参加している者もいる。在学中に学び方を学んだ生徒たちは、卒業後もそれぞれの学びの場を拡大している。

(4) 外国人生徒と神戸甲北高校

以上見てきたことを、「個性を尊重し、『ちがい』を認め合い高め合う関係を築き、『人間としての尊厳』を育む」という教育目標に照らし合わせてみよう。神戸甲北高校では、「個性」とは日本人生徒だけを対象とする個人的な資質というのではなく、外国人生徒を含むそれぞれの「ちがい」を認め合い高め合う関係が築かれていた。し

かも、それが特別な教育や取り組みによってなされるのではなく、すべての教育活動を通して生徒自らが学び取っていくという方法で貫かれていた。

もちろん、このプロセスは、自動的になされるわけでも、生徒の自発性に委ねられているわけでもない。調査をして感じたのは、活用しようと思えば利用できるさまざまな資源(カリキュラムや活動の場)が学校内外にしつらえられていることと、その仕掛けにうまく生徒を乗せようとする黒子のように働く教師の姿であった。特に後者に関しては、重要である。外国人生徒なら誰でも、総合学科に入ればその個性を活かして自己実現を図っていけると言えるほど簡単なことではないだろう。外国人生徒を「見つけ」、話しかけ、さまざまな情報の提供や活動への声かけがなされていた。高校という大規模な組織において、これは一教師でできることではない。もしひとりの教師の取り組みならば、その活動も生徒たちのネットワークももっと閉塞していただろう。神戸甲北高校には、それを全体化するシステムがあるとインタビューでうかがって、なるほどと思った。

それを成り立たせている背景には、外国人や外国にルーツを持つ生徒の教育を大切にしようというしっかりとした方針を有していることがあろう。外国人生徒を単に異文化な存在とだけ見なし、その活用だけを求める場合には、生徒の抵抗に遭うだけだろう。神戸甲北高校では、人権の視点に裏打ちされていることが大きい。それでももちろん、神戸甲北高校においても、外国人生徒がいつでもすんなりと自身の出自を出して学習できているわけではない。我々がインタビューした、比較的出自を出した生徒たちですら、さまざまな葛藤を抱え、それをぶつけていた。しかし、その葛藤や苦しみを共有しようとしたり、たじろぎながらも自分の立ち位置を考える日本人や外国人の生徒たちがいた。

したがって、単に総合学科であるということだけで、外国人生徒やその他の生徒がその個性や多様性を積極的に生かすようになるわけではない。神戸甲北高校に敷かれている下地として、兵庫県の在日外国人教育の積み重ねと、兵庫県という地域性という点で考えてみよう。

兵庫県は、全国でも最も早くから在日朝鮮人高校生の教育に取り組んできた歴史を有している。在日生徒の声に耳を傾け、在日生徒が集まる場所を作り(朝文研など)、進路保障に取り組み、学外の朝鮮奨学生のに繋ぐなどの活動を行ってきている。しかし、神戸甲北高校を見てみると、このような長い伝統を持つ取り組み方法だけではなく、新しい仕掛けも活用されて、新旧両用の働きかけが絶妙な具合に機能しているように感じた。

伝統的に語られてきた兵庫県の高校の取り組みは、定時制高校や実業高校が取り上げられることが多く、家庭的にも経済的にも困難な条件を持つ在日生徒にどのように働きかけて学業の継続や進路の保障(就職が多い)をするか、また生徒の名前使用や

アイデンティティの形成に直接働きかけることが重要だと考えられていたといえる。時には、学校全体の理解が得られないままに孤軍奮闘する教師がいたり、学校のシステムとして取り組むというより教師の個人的働きかけが強い場合もあった。神戸甲北高校では、一人一人の外国人生徒に教師が声をかけ、こまめに丁寧に働きかけるといふこの伝統的方法がとられる一方で、ひとりの教師の働きにだけ頼らないシステムが作られているようだ。生徒を把握することや、生徒の学びを保障する幅広いカリキュラムや活動場所の提供などである。また、従来在日外国人教育で進路保障という就職に限定されていたが、神戸甲北高校では高等教育への進学、特にAO入試による「有名」大学への進学など、新たなモデルを生み出している。

もう一つの地域性ということでは、時代性も含めて、神戸甲北高校のキャッチフレーズ ASV のうちの A(アジアと結ぶ)、V(ボランティアで学ぶ)に関わっていると思われる。アジアということでは、歴史的にも在日朝鮮人や中国人が多く住んできたという点も見逃せないが、ボランティアに関しては 1995 年の阪神淡路大震災の影響が大きいだろう。神戸甲北高校の総合学科は、この地震のせいで設立が遅れたということだが、震災後に「ボランティア元年」と言われる社会的なうねりがあり、これが取り入れられたとのことである。特に、地域の外国人とネットワークを結ぶボランティア活動が飛躍的に発展したことは、大きな影響を持ったと思われる。前節で紹介した卒業生が関わった FM 放送も、あの震災をきっかけとしてできた放送局である。インタビューした卒業生の中には、家族を震災で亡くした人もいた。

時代性ということで付け加えるならば、在日外国人の多様性が進展したことも指摘できよう。在日朝鮮人以外にも日系ブラジル人、ベトナム人、中国人など多様な人びとが増え、高校に進学するようになってきた。多様化する外国人生徒に対応できるシステムや文化が問われる時代になってきたわけであるが、総合学科というのは一つの実験場であることは確かであろう。

おわりに

以上は、主として我々の調査対象をもとにその他の資料もふまえながら、神戸甲北高校総合学科についてみてきた。我々の調査対象者が 5 期生までであり、朝文研活動に関わったという特性を持つ生徒たちだったので、積極性や個性的であるということでは特に本校の教育目標に合致したのかもしれない。それに対して、全体としては近年の生徒の特性に変化が見られることが同校教師によって危惧されているようだ。

総合学科が、ある時代の要請を受けて出発したこと、神戸甲北高校の特性はその地域性や時代性にも支えられて独自の特色を持つ高校として機能してきたことを考えると、今後の方向を 10 年という節目に当たってもう一度確認してみることは意味があるだろう。しかし、卒業後も生きる学びの力をつけることを目標としてきたのである

から、その成果を測るにはまだ時間が足りないともいえる。

我々の調査ももう少し継続する予定なので、6期生以降やこれまで対象にならなかった生徒も含まれるだろう。これまでの調査対象者にさらなる継続調査も実施する予定である。その時にもなお、以上の評価を下せるのかどうかは定かではないが、少なくとも今言えることは、学びの相互性(連鎖)と自律性という「学びの文化」は、出会いや体験をもとにした生徒たちの人間関係の中から生じていること、そこではさまざまな「ちがい」が触媒になることは確かだということである。

<注>

- 1) この章は兵庫県立神戸甲北高校『挑戦する総合学科—神戸甲北高校 10年の実践—』に寄稿した外部評価の原稿を再収録したものであり、この章で「本書」と書かれているのは本報告書ではなく『挑戦する総合学科』を指している。

[神戸甲北高校の生徒たちの作品一覧] [神戸甲北高校の朝文研および「アジアと結ぶ」教育改革についての参考文献]

1996「わたしと在日韓国朝鮮人生徒との出会い—朝鮮文化研究会を設立して—」『これからの在日朝鮮人教育'96』 全国在日朝鮮人教育研究協議会

1999「『アジアと結ぶ』を掲げた教育改革と韓国修学旅行のとりくみ」『これからの在日外国人教育'99』全国在日朝鮮人(外国人)教育研究協議会編、999

2003「『外国にルーツをもつ子どもたち』の教育課題と教育実践」『国際教育』34号、帝塚山学院大学国際理解研究所

2004「朝鮮文化研究会の10年を振り返って」『これからの在日外国人教育'2004』全国在日朝鮮人(外国人)教育研究協議会編

ルシエネ ユカ アキズキ マツバラ、「ブラジル人としての私」国際人権ブックレット5『子どものエンパワメントを考える』編集・発行：ヒューライツ大阪、解放出版社
ルシエネ ユカ アキズキ マツバラ、(財)日本国際連合協会主催「世界人権宣言50周年記念」第45回「国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」特賞「文部大臣賞」受賞作品(1999年11月25日)

(参考資料 ルシエネ ユカ アキズキ マツバラを取材した番組)

・NHK BS1「ハローニッポン—聞いてください！日系ブラジルキッズの思い」1999年9月18日

・NHK BS1「ハローニッポン—聞いて欲しい！子どもたちの声」2000年1月1日
黄竹「アイデンティティへの旅—在日中国人として—」『解放教育』「特集 子どもたちの生活世界を拓く」412号、明治図書、2002年4月

『届け！私の思い～「ニューカマー」の子どもたちの声』発行：全関西在日外国人教育ネット、協力：ヒューライツ大阪、2001年4月

『届け！私の思いⅡ ちがうことこそすばらしい 子ども作文集』発行：全関西在日外国人教育ネット、2006年2月

「ちがうことこそすばらしい！子ども作文コンクール」の受賞作品と受賞者（○は朝文研の生徒）

年度	タイトルと受賞生徒名
1997	「私のなかのブラジルと日本」 ルシエネ ユカ アキズキ マツバラ（1年）
1999	「心の変化」 ○姜 優 子（1年）
2000	『『在日中国人』としての自己確立までの旅』 賀 行（3年）
	「本当の自分に向き合うことが出来た高校時代」○釜 実 鈴（3年）
2002	「日系ブラジル人としての私の課題」 ルアナ ユミ アキズキ マ ツバラ（3年）
	『『在日』を考える』 ○曹 順 華（3年）
2003	「なまえ…이름~二つの名前(国)の狭間で~」 ○糸 路 実（3年）
	「高校時代の私の体験とこれから歩む道」 ○成 本 いぶき（3年）

曹順華とルアナの「FMわいわい」におけるDJ活動、「バーサムトレイス」DJ: ミミ / スナ / ユミ

<http://www.tccl17.org/rec/content/view/30/41/>

<http://www.tccl17.org/facil-kids/kids/past/2001.html>

<http://www.tccl17.org/fmyy/timetable/sat.html>

ルマ ユリ アキズキ マツバラ、『レモン』東京ビデオフェスティバル2006 ピープル賞受賞

<http://tvf2007.jp/movie2/index.php?itemid=14>

ルマ ユリ アキズキ マツバラ、(財)日本国際連合協会主催「世界人権宣言 50周年記念」第53回「国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」特賞「文部大臣賞」受賞作品（2006年11月24日）

〔その他の参考文献〕

宮本幸二・森下伸也・君塚大学(1994)『組織とネットワークの社会学』新曜社
菊地栄治編（2000）『進化する高校 深化する学び—総合的な知をはぐくむ松高の実践』学事出版

荒川（田中）葉（2001）「高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容」『教育社会学研究』第 68 集

三戸親子（2001）「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第 69 集

大脇康弘・田村昌平編（2002）『学校を変える 授業を創る－今宮総合学科の挑戦』学事出版